

# 風知草

特別編集委員 山田孝男

総務省幹部の国会答弁で気になることの一つに「東北新社様」という、卑屈な呼び方がある。

「東北新社」でいい。

国民に尊大な印象を与えまいという無意識の用心から、見境なく「様」を連発するのだろう。当人が滑稽さに気づかない。

「週刊文春」が現場写真をすっぱ抜いて間もなく1カ月。官業癒着の元凶は官僚か、総務省との因縁深い菅義偉首相か。問題の腑分けが必要だろう。

東北新社は映画の製作や配給、衛星放送事業などを手がけている。総務省の調査によれば、2016年か

## 接待問題を腑分けする

ら20年にかけて、同省幹部ら13人が計39回、60万円超の接待を受けていた。接待の目的は何か。公の説明はないが、高画質4K衛星放送への参入

をめぐり、有利な電波帯域の確保や人工衛星利用料の引き下げを期待した——という見方がある。

接待の後、総務省の有識者会議がまとめた報告書の表現が微妙に変わり、東北新社に有利になった——という報道もある。

では入接待汚職かと言えは微妙。官僚の職務権限は明確だが、支払総額が非

常識なまでに高額と言えるか(一人一回7万円超の印象は鮮烈だが)。

1998年、旧大蔵省接待汚職事件を捜査した当時の東京地検特捜部長、熊崎勝彦(79)が言う。

史上初めて接待を贈収賄で立件できたのは、大蔵官僚が銀行から1人数百万円の接待を受け、しかも「パンしゃぶしゃぶ」に象

徴される悪質性が顕著だったからである(熊崎「平成重大事件の深層」中公新書ラクレ、昨年刊)。

この基準なら総務省のケースは摘発できない。大蔵省への捜査さえ、世論迎合でやり過ぎだった——という異論が根強い。

大蔵省接待汚職は、律令時代以来の大蔵省という名称を消滅させた。財務省と



題字・絵 五十嵐晃

金融庁が生まれ、国家公務員倫理法成立の契機になった。中央官庁捜査のハードルが下がる一方、検察の暴走も断罪されるなど複雑な経過をたどり、野放図な官僚接待は減った。

後から考えてみれば本質を突いている。金融機関が財務省OBを受け入れ、自社に有利な裁量を期待する感覚と同じ。いわば、潜脱的な(法令の規制をかいくぐる)天下りです」

もう一つの論点は菅首相の責任である。総務官僚を接待した東北新社の部長は首相の長男だった。

2月22日、立憲民主党の

奥野総一郎が衆院予算委でそこを突いた。奥野は「事実上の天下り(官僚OBの企業などへの再就職)。就職を止めるべきだった」と追及。菅は「どうして天下りか」と反発したが、政府高官がこう語る。

菅は06年、第1次安倍内閣で総務相。この時、25歳の長男は総務相秘書官を務め、安倍退陣後の08年、東北新社に入った。並の大臣は辞めれば一議員だが、菅は特別だった。官房長官8年を経て首相。放送事業会社から見れば、長男は値千金の人人材だった。

「天下りと聞いて、最初は私も首をかした。でも

毎週月曜日に掲載 2021.3.1